私の母は、高齢者の介護の施設で働いています。ある日、支援学校から知的障害を持っている女性のＨさんが就業体験をしに来たそうです。そのときの母から見た印象はとても元気で、笑顔が絶えなく、挨拶も大きな声で良くできていて、とにかく明るい人だなと思ったそうです。このときは洗濯をする仕事を体験しに来ていたけれど、その後また来られて、次は介護の仕事の体験をしたそうです。すると、Ｈさん本人が高齢者と関わるのが楽しかったようで、「私は絶対ここで働きたい」と言ったそうです。しかし、障害を持っている人は今までその施設で雇ったことがなく、母は障害者が福祉の道で仕事をすることができるのだろうか、障害者なのに高齢者をお世話することができるのだろうかと考え、不安でＨさんを受け入れるか家でもずっと迷っているのを見ました。しかし、本人が働きたいという強い気持ちを持っていたため、受け入れることにしていました。

【高校生の部】〇最優秀賞

富山県立南砺福野高等学校　二年

「障害者でも仕事ができる」

　私は母からＨさんの話を聞いて、どのような人なのか気になり、施設で夏休み中に納涼祭があったためボランティアをしに行くと共にＨさんの仕事をしている様子を見に行ってみました。まず、施設に着き初めてＨさんと私が会ったときに私より先に大きな声で挨拶をしてくれました。初対面にも関わらず凄く近い距離で私の顔を眺められ、最初は何をされるのだろうと少し戸惑ったけれど、「ボランティアで来ました。今日一日よろしくお願いします」と言ってみると、また大きな声で「よろしくお願いします」と笑顔で返ってきて、私よりもハキハキ話していて母の言っていた通りとても元気で明るい人なんだなと感じました。初対面の人など、どんな人にも恥ずかしさがなく、平等に元気さを振る舞える点には、介護の現場では大切なため、尊敬しました。目が合ったときにはニコッと笑顔で「緊張しなくてもいいよ。ここに座って皆さんとお話しする？」や、「何か困ったことがあったら言ってね」と言われ、気がきいて、優しい人だなと思いました。また、母はバイタルチェックを教えたそうで、私が施設に行ったときには一人で利用者の方とコミュニケーションを取りながら測定をしていて、知的障害を持っている人だと忘れるときが何度かありました。もちろん、いつ何があるか分からないため、送迎時や入浴時は他の職員と共に行動していました。Ｈさんは人懐っこさもあり、たまに戸惑うこともあったけれど、とても愛嬌があり常にニコニコしていて周りの人を和ませる癒しの存在でもあると気づきました。

　他の職員も交えた昼休憩中に将来の話になりました。他の職員の方に「将来何になりたいの？」と言われ、「介護福祉士です」と答えている会話がありました。すると、納涼祭も終わり、帰り際にその話を覚えてくれていて「私、応援しとるよ、亜優楓ちゃんなら大丈夫。いつか一緒に働けたらいいね」と肩に触れられながら言われ、国家試験に向けて勉強や実習をより一層頑張ろうと思いました。

　Ｈさんの仕事をしている姿を目にして、障害を持っていても人と関わる仕事をすることができるのだと母と共に知らされました。何よりも利用者の方と話しているときのＨさんも利用者の方もお互いが楽しそうでいいなと思いました。

　障害を持つ人と働くとは、周囲の人の理解を得た上で、できることはもちろん、難しそうなことには覚えられるように日々訓練していく必要があると思いました。また、障害を個性として見てみると、その人ならではの良い部分が見えてきて捉え方を変えることが必要だと思いました。

　最近は、障害のある人の職業の安定を実現する具体的な方策を定めた障害者雇用促進法があり、障害者が普通の人と同じように働く割合が増えていると思います。これからも障害の有無に関わらず皆が平等に働ける、暮らせる時代になっていくといいです。